

# 社会科学習を通じたアクティブ・ラーナーの育成

～生徒が主体的・協働的に学び合う教室を目指して～

大和高田市立高田中学校  
教諭 栗山 泰幸



## 1 はじめに

「社会科は暗記教科」。教職について12年、幾度となく聞いてきた台詞だ。確かに、社会科の学習といえば都道府県名や年号、重要法規の文言を覚えるといった側面がある。しかし、本当にそれだけだろうか。

中学校学習指導要領は「国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。」と社会科の目標を定めている。この目標を達成するためには、知識を身につけるだけでなく、社会の諸問題に高く関心を持ち、生徒一人ひとりが自分なりに課題を見つけ、課題の解決に向けて考えを深めたり、考えを適切に表現したりする力が必要だ。そして子どもたちが手を取り合い、急速に変容するこの時代をたくましく生き抜いていく力を育てていく。これこそ社会科という教科の本質ではないか。その信念に基づいて、私は教壇に立ってきた。

折しも文部科学省は、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習、いわゆる「アクティブ・ラーニング」と、そのための指導の方法等を充実させていくことの必要性を唱えている。（「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」諮問、2014）

これらを踏まえ、本稿では、①生徒の学習意欲や思考・判断・表現力を高めるための授業内容と指導方法の工夫、②一人ひとりが自信をもって、自分らしさを発揮できる環境づくりという2点から主題へと迫った。

## 2 主題設定の理由

### (1) 本校の実態

私は、2015年4月に本校に着任し、当時2年生の学級担任と社会科の教科担任を任せていただくことになった。学年の生徒数は146名、明るくて人懐っこい生徒が多く、休み時間になると大きな笑い声が廊下中に響き渡っている。その一方、生徒同士で人をからかう冗談や暴言が飛び交っていたり、メールやSNS等のや

り取りから行き違いや、仲たがいが起きていたりして、人間関係のトラブルが起きない日はないといってもいいほどであった。また、これまでの全国学力・学習状況調査の結果から、本校の生徒は「自分には良いところがあると思う」という質問に肯定的に回答した割合が約50%で、全国や奈良県の平均と比べて15pt近く低いことや、自分で課題を設けたり、自分の考えを書いたり、説明したりする力に大きな課題が見られていた。

### (2) 社会科授業の実態

着任してまず、私は社会科という教科の印象について生徒に聞き取り調査を行った。すると、生徒の多くは、①社会科の授業といえば、黙って席に座り、配られたプリントの空欄に教師が読み上げる正解を写す時間である。②社会科の勉強とは、その正解をテストのために暗記することであるという印象を強く持っていることがわかった。

これらの状況と、子どもたちが手を取り合い、急速に変容するこの時代をたくましく生き抜いていく力を育てたいという私の願いが組み合わせられたとき、社会科の学習を通して主体的・協働的に学ぶ生徒「アクティブ・ラーナー」を育てていくことが私の責務であると考え、本主題を設け実践的な研究を行った。

## 3 仮説

教師が授業内容や指導方法を工夫し、生徒の学習意欲や思考・判断・表現力を高めるとともに、生徒一人ひとりが互いの良さを認め合い、自信を持って自分らしさを発揮できる環境を整えれば、主体的・協働的に学ぶ生徒「アクティブ・ラーナー」が育つであろう。

## 4 アクティブ・ラーナーの定義と目指す生徒像

本研究実践にあたり、主体的・協働的に学ぶ生徒「アクティブ・ラーナー」を以下のように解釈し、教科を通して目指す生徒像を具体的に設定した。

自らの意志と判断によって行動し、目標や課題の解決に向けて仲間と協力できる人

・教科を通して目指す生徒像

- (1) 自ら進んで学びに取り組める生徒
- (2) 人と話し合いながら学べる生徒
- (3) より深く学ぼうと工夫できる生徒

## 5 1年目の実践と検証・考察 (2015年度-2年生)

### (1) 生徒の動きがある授業づくり

4月、私は授業の中で生徒の動きを生み出すことに真っ先に取り組んだ。なぜなら、社会科の授業に対する、黙って自席に座り、教師が正解を読み上げるのを待つという受動的な印象を、何よりも先に打ち砕きたかったからだ。そして、授業の中心はあくまでも子どもたちであり、子どもたち自身でより良い授業を作り上げていくのだということを実感させたかった。具体的には、授業の内容に合わせて座席の配置を変えさせ、隣とペアにしたり、横一列にしたり、グループにしたりして、友達と協力しながら学習できるようにした。また、黒板を生徒に解放し、重要語句や課題に対する自分の予想などを自由に書かせるようにした。

【グループで発表】



【黒板を解放】

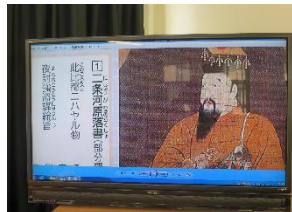


### (2) ICT 機器と自作教材の活用

私は毎時間、授業にノートパソコンとデジタルカメラを持ち込んでいる。ノートパソコンは教室に備え付けられている大型液晶テレビと接続し、教科書や資料を拡大掲示したり、作業時間を示すタイマーを映し出したりした。また、『NHK for School』で配信されている番組や動画を、学習の導入やまとめに活用した。

デジタルカメラは授業の中で生徒が意欲的に取り組んでいる様子や自分の考えをしっかりとノー

【教科書の拡大掲示】



【タイマーの表示】



トに記入できている点、資料を適切に活用できている点などを撮影することに用いた。そのようにして撮影した画像をノートパソコンに読み込んで大型液晶テレビに映し出し「その様子の何が具体的に良かったのか」を価値づけて褒めることで、授業における「良い学びの姿」を教室全体で共有することができた。

【事前の準備が丁寧にできている】

【資料を適切に活用している】



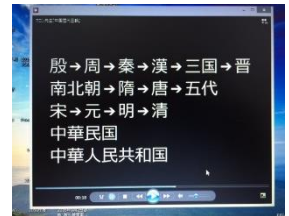
また、パソコンのプレゼンテーションソフトや音声・動画再生ソフトなどを活用し、自作教材の開発も行った。教育学者のEdgar Dale (米・オハイオ州立大学)によれば、ただ本を読んで学ぶことに比べて視聴覚を用いて学ぶ方が、5倍程度学習効果が高い。(『学習指導における聴視覚的方法』経験の円錐、1946)

実際に、これらの視聴覚を用いた教材で学習を進めることで、生徒は動きやリズムに合わせて、積極的に学習に取り組むようになっていった。

【プレゼンテーションソフトで解説】



【リズムに合わせて】



### (3) 板書の工夫とノート指導

社会科の教師にとって、板書は指導の要である。たくさん書きすぎると何が重要なかわかりづらくなり、簡略化しすぎるとかえって考えを深めることが難しくなる。そこで、私は次のように板書を工夫した。

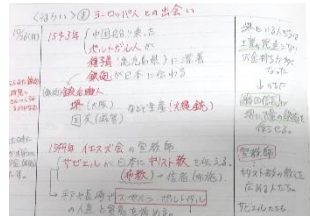
①生徒が見通しを持てるよう、板書するときは、黒板の右下いっぱいまでと先に決めておく。したがって、誤字の訂正以外、黒板消しは一切使用しない。②板書のはじめに、本時のねらいを大きく書き出す。③黒板を左・中・右と三分割し、左は導入、中は展開、右はまとめや次の課題に関わることを板書する。

しかし、この板書を丁寧に写したというだけでは、生徒が授業に主体的に取り組んでいるとはいえない。そこで、ノートの右端にあらかじめスペースを設けさせ、自分で調べたことや、課題に対して自分なりに考

えたことを書かせるようにした。また、授業の最後のまとめには、授業の中でわかったことや友達の意見か

【ノートの一例】

ら考えたこと、次の課題に対する予想などをまとめた文章を「まとメモリー」と題した文章で毎時間書かせるようにした。



そして、積極的に調べ学習や「まとメモリー」に取り組み、自分らしさを生かしたノート作りができていた生徒に「ノート大賞」を与え、学期ごとに表彰した。さらに、夏休みには自分の好きな歴史上の人物について、自分なりに調べてまとめるレポート課題を与え、全ての作品を廊下に掲示して、生徒に鑑賞させた。そういった中で、生徒一人ひとりが、互いの良さや頑張りを認め、学びを深めて合える授業へと一歩ずつ近づいていった。

#### (4) 評価と定期テストの工夫

教科の評価は目標に準拠した評価、いわゆる絶対評価を観点別に行っている。この評価をより良く生かすため、私は以下のことに取り組んだ。①授業の中で、その時間の課題に対して、どのような観点と方法で評価するかを明らかにする。例えば、「資料を見て気づいたことを8個以上書ければA、5個以上ならばB、4個以下ならCです。」といったように、先に評価基準を示しておけば、生徒は具体的な目標を持って課題に取り組むことができる。②定期テストの問題を観点別に作成し、採点后に観点別の達成状況を割合で示して返却した。③定期テストと合わせて、記述式の総合問題を出題し、学習意欲や思考・判断・表現力、資料活用の技能を総合的に評価できるようにした。

#### (5) 検証・考察

5月に実施した1学期中間テスト期の学年全体の観点別達成状況と、2学期から3学期に実施した同観点別達成状況(平均値)を比較し、t検定を行ったところ、5%水準で有意差が認められた。【表1】

この結果から、1年間の取り組みの中で、生徒の社会科への関心や学習意欲、思考・判断・表現力が向上していることがわかった。いっぽう、知識理解の観点別達成状況にほとんど変化はなく、資料活用の技能は若干低下していることも明らかになった。

また、12月に行った総合問題の達成状況では、学習

意欲や思考・判断・表現力、資料活用の技能の観点において、約半数の生徒が80%以上達成できている一方、約30%の生徒が50%に満たない達成度であった。これは、学年全体の学力が二極化していることを示していると考えられた。【表2】

【表1：観点別達成状況の比較I】

観点別達成状況	関心意欲	思考判断表現	資料活用	知識理解
1学期中間	65.2%	26.4%	58.7%	56.9%
2~3学期平均	68.8%	61.0%	56.9%	57.2%
差(pt)	3.6	34.6	-1.9	0.4

【表2：12月実施総合問題評価別割合】

評価	A	B	C
達成度	80%以上	50%以上	50%未満
人数割合	51%	17%	32%

## 6 2年目の実践と検証・考察 (2016年度-3年生)

### (1) 1年目の成果と課題から

1年目の実践から、学年全体の学力の二極化が明らかになった。また生徒は、ペアやグループで仲間と相談しながら学習に取り組むことに慣れてきた一方、自ら課題を設けたり、それぞれの考えを持って対話しながら課題の解決を探るといった協働的な学びには発展できていないように感じられた。

先に示した Edgar Dale は、問題について話し合ったり、実際に体験したりすることが最も学習効果が高いとしている。そのため2年目は、学力の二極化解消と協働的な学びの確立を目指して、以下のことに取り組んだ。

### (2) より自由な学びの保障

それまで、ペアやグループでの学習は席の近い者同士や、学級で定められている班を指定して行っていた。この形式では、生徒は決められた課題や作業に対しては、友達とよく協力して学習することができる。その一方、自ら課題を設けたり、課題の解決を目指して友達と対話したりすることがしづらいという生徒の実態があった。互いに遠慮してしまい、なかなか動き出せないのだ。まだまだ、生徒一人ひとりが自信を持って、自分の考えを話し合えるといった関係性が、教室全体に築けていない。私にはそのように感じられた。

そこで私は思い切って、ペアやグループの作り方、机の配置等を生徒が自由に決められるようにした。また、これまでの「まとメモリー」に、友達の良かった点や友達から学んだ点を記入させ、それを互いに伝え合う時間を設けた。そうすることで、生徒はわからないところを友達に聞いたり、自分の考えを話したりすることがしやすくなり、それまで以上に自信を持って、積極的に学習に取り組むようになっていった。

また、課題に対し自分なりに考えたことや友達の意見から考えたことなどを生徒全員が黒板に書き、それを使ってさらに教室全体で考えを深めていく「考える黒板」という取り組みも進めていった。

【友達と対話しながら解決を探る】



【ロッカーの上を使って】



【考える黒板】



### (3) 絶対解から納得解へ

課題を精選し、授業の展開の中で絶対的な正解のない社会的課題を与え、自分も相手も納得できる解決策「納得解」を自分に合った方法で探究していく時間を設けた。また、それらの中で自分なりに見出した新たな課題をまとめさせるようにした。すると、全ての生徒が3人~6人程のグループを自由に作り、協働しながら学習に取り組むようになっていった。

【力を合わせて】



#### 【1学期に取り組んだ納得解を探究する課題の一例】

- ・ 少子高齢化問題をマインドマップで表そう
- ・ SWOT分析で選択的夫婦別姓を考えよう
- ・ コンセンサスゲーム「最高の時間割づくり」
- ・ 政治シミュレーション「この街を救済せよ」

### (4) 検証・考察

2年時の学年全体の観点別達成状況(平均)と、3年生1学期中間テスト期の学年全体の観点別達成状況を比較し、t検定を行ったところ、5%水準で有意差が認められた。【表3】

【表3：観点別達成状況の比較Ⅱ】

観点別達成状況	関心意欲	思考判断表現	資料活用	知識理解
2年時平均	67.0%	43.7%	57.8%	57.1%
3年1学期中間	73.9%	53.8%	60.9%	57.2%
差(pt)	6.9	10.1	3.1	0.1

この結果から、2年時から3年1学期中間テスト期にかけて、生徒の社会科への関心や学習意欲、思考・判断・表現力、資料活用の技能が向上していることがわかった。知識理解の項目にほとんど変化はなかった。

また、今年度の全国学力・学習状況調査結果によると、本校生徒が「自分には良いところがあると思う」との質問に肯定的に回答した割合は64.8%であり、昨年度の同割合50%を大幅に上回り、全国や奈良県の平均との差は10pt近く解消された。いっぽう、3年生の1学期の間に、学力の二極化解消を考察するための十分な資料を得ることはできなかった。

### 7 仮説の検証

教師が授業内容と指導方法を工夫することで、生徒の学習意欲や思考・判断・表現力が高められた。また、生徒一人ひとりが互いの良さを認め合い、自信を持って自分らしさを発揮できる環境を整えることで、主体的・協働的に学ぶ生徒「アクティブ・ラーナー」の姿が見られるようになった。よって、仮説は支持された。

### 8 成果と課題

【成果】①授業内容や指導方法を工夫し、生徒の学習意欲や思考・判断・表現力を高めることができた。②生徒一人ひとりが互いの良さを認め合い、自信を持って自分らしさを発揮できる授業づくりに取り組めた。

【課題】①学力の二極化解消を目指して、さらに実践研究を進めたい。②本研究実践を学校全体に共有し、他の教育活動においても積極的に活用していきたい。